# 退屈な人生を歩んでいたおっさん、異世界に飛ばされる

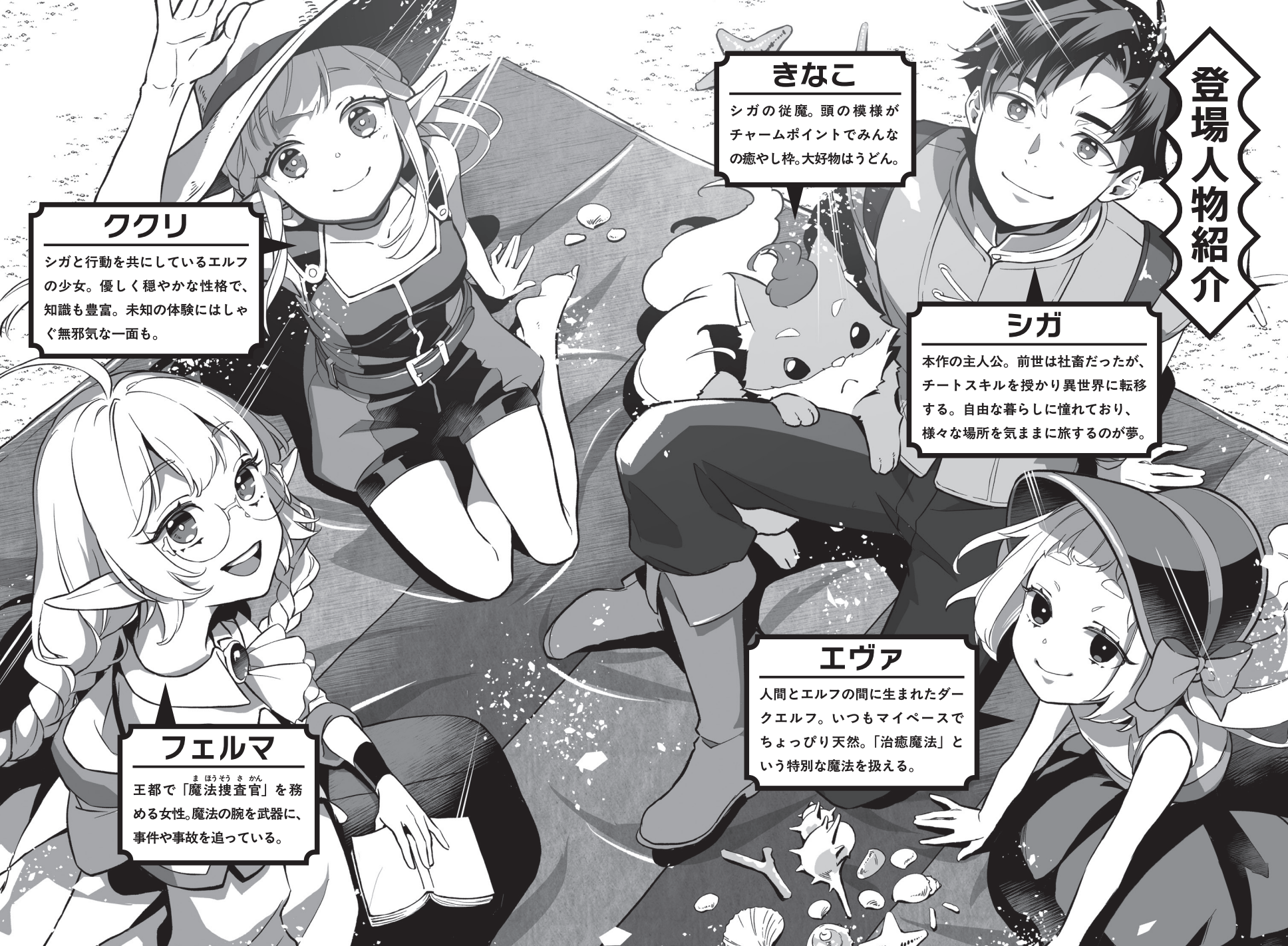
taikutsu na jinsei wo ayundeita ossan, isekai ni tobasareru

vol.3

AUTHOR 菊池快晴

Illustration 岡谷




登場人物紹介
きなこ
シガの従魔。頭の模様がチャームポイントでみんなの癒やし枠。大好物はうどん。
ククリ
シガと行動を共にしているエルフの少女。優しく穏やかな性格で、知識も豊富。未知の体験にはしゃぐ無邪気な一面も。
シガ
本作の主人公。前世は社畜だったが、チートスキルを授かり異世界に転移する。自由な暮らしに憧れており、様々な場所を気ままに旅するのが夢。
エヴァ
人間とエルフの間に生まれたダークエルフ。いつもマイペースでちょっぴり天然。「治癒魔法」という特別な魔法を扱える。
フェルマ
王都で「魔法捜査官」を務める女性。魔法の腕を武器に、事件や事故を追っている。

# 序章　遅れてきた夏休み

私の名前はキミウチシガ。性別は男。黒髪黒目、自他ともに認めるおじさんだ。
元々はブラック企業に勤めていたが、過労により死んでしまい、異世界に転生してきた。
神のような人から突如として固有スキル『お買い物』を授かり、それが前世でよく利用していたＮｙａｎｙａｓｏｎと呼ばれるショッピングサイトを使用できるものだということがわかった。
異世界の生活は楽しくも厳しい。だが、Ｎｙａｎｙａｓｏｎのおかげでお腹が空けばおにぎりを食べられる。喉が渇けばビアーを飲むことができる。
私の異世界生活は非常に充実していた。
「がうがう！」
「きなこ、このあたりか？」
生い茂った森の中、私の愛魔獣のフェンリル――きなこが木の下に向かって吠えた。
きなこの大きさは子犬くらい。白いもふもふの毛並み、可愛らしい尻尾が激しく揺れる。
きなことの出会いは異世界へ来てから数日後だった。

私は異世界では特異体質のようで、現状に不満を抱くと視界に映し出されるステータスに文言が表示される。
『寂しい』と書かれた文字に呼応するかのように、魔獣召喚というスキルを得た。
大声で叫んでみると、きなこが現れた。それからずっと、私の心を癒してくれている。
「ここ掘れがうがう、というわけだな？」
「がうがう！」
「私は構わないが、きなこは掘らないのか？」
「がう」
「手が汚れるのがちょっと？」
「がう」
「なるほど、私に任せろ」
きなこの気持ちを完全に理解できるのも、私たちが一心同体だからだ。
すると土に覆われていて初めは見えなかったが、大きなキノコが出てきた。
慎重にすくい取る。どこかマツタケに似ていた。
「よし、これを持って帰ろうか。きっと、ククリとエヴァも喜ぶぞ！」
「がう！」



するときなこは自らの体を大きくさせた。
子犬ほどだった体はライオンのような立派な大きさとなり、背中に乗れと言わんばかりに近づいてきた。
「いいのか？　私は結構重いぞ」
「がう！」
久しぶりに騎乗し、毛並みのふわふわさに驚く。
ああ、なんて素晴らしいんだろう。
「がう！」
だけど出発してすぐ、あまりのスピードに、私はただただ強くしがみつくしかなかった。
きなこ、速すぎないか？

◇　　◇　　◇

山の中の開けた場所へ戻ると、仲間であるククリとエヴァが焚火を熾してくれていた。
二人とも耳がピンと立っており、人間の耳とは違う神秘さがある。
だがエヴァは片方の耳が黒い。

人間とのハーフゆえに表れる特徴だという。
「ククリ、待たせたな」
「早かったですね。シガ様、きなこちゃん」
ククリは、随分と前に購入した桜色のエプロンを着けていた。
料理をしているわけではないのだが、火を扱うと炭が飛んでくるので、汚れないようにだ。
「ご苦労、シガ、きな」
その横でエヴァが静かに言った。
頭にはこれまた家庭用の頭巾を被っている。今は必要ないだろうが、お気に入りというわけだ。
私ときなこが森に入っていたのは、危険な魔物や人がいないかの捜索と、ついでに食べられそうなものがあれば採ってくる、といういつものルーティンのためだ。
私が持ってきたキノコを、ククリがジッと見つめている。
「シガ様、そちらのキノコ、毒キノコですね。食べると最初は涙が止まらなくなり、その後は、生涯どんな感動的なことがあったとしても、一滴の涙も出なくなるものです」
キノコの中に一つだけ青いのが混じっていたが、全然気づかなかった……。
「よし、食べるのは諦めよう」
「がう……」



焚火に投げ込もうと思ったが、私はその場でNyanyasonと叫んだ。
見慣れたオンラインショッピングサイトが視界に現れる。その横にある黒い穴に毒キノコを投げ込んだ。
『計算中、計算中。――十円にゃあ』
「おお、少ないがお金になったぞ」
Nyanyasonの凄いところは、異世界の価値あるものを穴に投げ込めば、サイト内のマネーに変換できることだ。
今回は毒だったのでダメかと思ったが、それでもお金になってくれた。
「さすがククリは物知りだな。いつも助かるよ」
「とんでもないです。私はただ、里の人たちから教えてもらっていただけですから」
今でこそ明るい彼女だが、初めて出会ったときは様子が違った。
目は虚ろで、口調こそ丁寧だったが、奴隷として売られていたのだ。
私は彼女を自由にさせたいと思い、彼女を購入した。
しかし、情けないことだが、その後をまったく考えていなかった。
異世界で生きるのは現代で生きるのとは違う。国を出れば魔物がうようよしている世界。死は常に傍にいる。

私は彼女を無責任に放り出すのではなく、こうやって共に旅をすることにした。
知識の豊富なククリは、私のような異世界に無知なおじさんにはもったいないほどの最高のパートナーである。
「きな、落ち込むな。間違いは誰でもある」
「がう」
エヴァが、意気消沈したきなこの頭を撫でる。彼女とは護衛任務で知り合った。
戦争に敗北した国の元王女で、両親は既に他界してしまっている。
最初は私たちが護衛対象として守っていたのだが、「自らも強くなりたい」という彼女自身の強い願いにより、今では共に戦う仲間となった。
以前訪れた年中冬の街では、素晴らしい活躍を見せてくれた。
凄まじい雪崩でも諦めず、多くの人を助けたのだ。
彼女たちといると、いつも身が引き締まる。
一応私もちょっとばかり強いので、助け合いながら生きている。
私たちは、本当にいい仲間だと思う。
「シガ様、お夕食はどうしましょうか？　街で購入した食事もちょうど切れちゃいましたし、キノコだけではお腹は膨れないですよね」



「そうだな。Ｎｙａｎｙａｓｏｎで何か食事を購入するか」
「私はチョコレート」
「エヴァ、それはおやつだよ」
「チョコレート二つ」
「数を増やしてもダメだ」
頬を膨らませるエヴァ。
すっかり甘い物が好きになってしまったな。
その横でククリが手を挙げる。
「鮭おにぎりは食事ですよね？」
「そうだが、栄養が偏ってしまう。最近食べ過ぎではないか？」
私の言葉にククリも頬を膨らませる。
次にきなこが、うどんを食べたいと吠えた。
却下はしないが、やっぱり栄養的に偏ると伝えた。
きなこも二人の真似をするように並び、私の言葉に納得がいかないようだ。
Ｎｙａｎｙａｓｏｎは食品も購入できるので便利だが、一方で楽すぎるのも問題である。
スキルは授かりものだ。いつなくなるのかわからない。

もう少し自力で食料を調達することを考えてもいいだろう。
私はそのことを伝えた。毒キノコのように食べられない物もあると思うが、勉強も兼ねてこの森で食べられそうなものを集めるのはどうだろうか、と。
「鮭おにぎりが食べられないのは残念ですが、シガ様の言う通りですね。私は賛成です」
「山の食料は私のもの」
「がうがう」
ククリは冷静だが、エヴァときなこは既に戦闘モードに入っている。
私は年長者ではあるものの、パーティーでの行動は全員で意見を出し合う。カリスマ的なリーダーがすべての決定権を担う場合もあるだろうが、私にはとても荷が重い。
もちろん、間違っているときは遠慮なく言ってくれと頼んでいる。
頼りにならないかもしれないが、お互いの成長になっていると思う。
今はまだ明るいけれど、数時間ほどで日が暮れるだろう。
じわっと背中に汗をかくほど湿度があるものの、食欲はある。
先ほどの通り、私たちは食事の好みが違う。その食欲も満たせるとなると――そうだ。
「みんな、今の気温はどうだ？　どう感じる？」
「ええと、少し暑いですかね」



「ちょい暑」
「がう」
日に日にエヴァの口調が現代っ子っぽくなっているのはさておき、どうやら同じ気持ちのようだ。
夏、山、好みは様々、食欲を満たしたい――。
「ＢＢＱをしよう」
「え？　ＢＢＱってなんですか？」
「バーベキュー。屋外で炭や薪を使って、肉や野菜などの食材を焼き、みんなで食べることだ！」
私は、得意げに言った。
夏といえばの行事だ。しかし、屋外で食材を焼くのは、普段からよくやっていることではないか？　と気づく。
エヴァとククリ、きなこまでもがポカンとしている。
異世界では日常茶飯事のことだ。何を当たり前なことをと思われている。これはまずい。
『お買い上げ、ありがとニャーン！』
「これが、ＢＢＱセットだ！」
私は急いでＢＢＱコンロセットを購入した。
足の長い高めのコンロに鉄板付き。奮発して新しいチェアまで。

「凄い。この道具で焼いてみんなで食べるんですか!?　楽しそうです！」
「夏といえばＢＢＱなんだ。みんなでやろう」
「がう！」
良かった。呆れ声を出されていたら、私はショックで寝込んでいたかもしれない。
「となると食料を別で担当したほうがいいな。私は肉を探す。きなこには食べられそうなキノコや山菜をお願いしていいか？」
きなこは間違えてしまったことに落ち込んでいた。もう一度頑張ってもらって、成功体験を積んでほしい。
もちろん、返事は元気よく「がう！」だった。
「エヴァとククリは川を探して魚を捕ってきてほしい。木の実などもあると嬉しいが」
「任せてください。行こう、エヴァちゃん」
「すべてを奪いつくす」
ククリとエヴァは右拳を強く握りしめ、森へ入っていく。
離れるのは心配だが、仲間とは支え合って信頼するものだ。
二人なら魔物が現れても問題ないだろう。
「さて、きなこ、どっちがたくさん採ってこられるか勝負だ」

「がう！」

◇　◇　◇

「……みんな、凄すぎないか」
ＢＢＱをしようと高らかに叫んだ私は、美味しそうな猪の魔物を狩って戻ってきた。
私としては急いだつもりだったが、既に準備はすっかり整えられていた。
「野菜は等間隔に。魚は骨まで取ってね」
「わかった」
「がうがう」
ククリが指示を出し、エヴァときなこがアシスタントを務めている。
魚が三十匹ほど、山菜と木の実だろうか。ハチミツと思われるものまである。
キノコは四種類ほど山積みになっていた。ククリが何も言っていないということは、すべて食べられるものなんだろう。
異世界では自給自足が当たり前だ。私が思うより、みんな幼少期からこういったことをしてきたのだろう。

きなこの幼少期は聞いたことがないが。
「みんな、美味しそうなものを獲ってきたぞ！」
「シガ様、そこの炭を取ってもらえますか？」
「着火開始」
ほぼ毎日キャンプみたいなことをしているので、手際が凄く良い。
私は急いで作業に加わった。
「シガ様、この棒は何に使うんですか？」
「ＢＢＱでは食べやすいように肉や野菜を小さく切って、この棒に刺していくんだ。ほら、こんな風に」
「シガ、私もやりたい」
「手に刺さらないように気を付けるんだぞ」
エヴァはなんでもやりたがる。自分でなんでもできるようになりたいのだろう。
私たちの中で誰よりも幼く、だが、誰よりも強くなろうとしている。
その意欲は見習わないといけないな。
玉ねぎなどは森になかったので、必要そうな食材だけＮｙａｎｙａｓｏｎ（ニャニャソン）で購入した。
準備だけでも時間がかかってしまい、気づけば夕暮れになっていた。



「よし、このくらいでいいだろう。みんなお疲れ様。といっても、ここからが本番だが」
「ＢＢＱって準備が大変なんですね。でも、初めてのことばかりで楽しいです！」
「お腹がペコペコ」
どこで現代語を覚えてくるのかわからないが、エヴァは自らのお腹をさすった。
キャンプ用のテーブルには、下ごしらえを終えた肉串や野菜、魚が綺麗に並んでいる。
「さっそくいただこう――おっと、その前にアルコール消毒だな」
「雑菌は怖いですもんね」
「ピカピカ」
食事前の手洗いは欠かせない。
だがそこで大事なことを忘れてしまっていた。
火の準備だ。
ＢＢＱで何より大事なのは炭に火をつけること。
時間がかかるし、意外と難度が高い。
だがそこでハッとなる。今の私にあるもの、それは――魔法だ。
「――火よ灯（とも）れ」
炭に手をかざしながら、脳内でイメージする。

徐々に火が灯り、炭が燃え盛る。
数秒後、私の手のひらから放たれた魔力が炭を覆いつくし、ＢＢＱができる状態になった。
「シガ様の魔法はやはり凄いですね。私ではこんなに綺麗にできません」
「私が凄いわけではないよ。魔法が凄いんだ」
ククリから言われて、改めて魔法について考える。
一体どういう原理でこうなるのだろうか。ゲームの世界では魔法は当たり前だったが、こうしてみると理屈では説明できない。
「シガ、準備万端」
「なら串を並べてくれ。火力の調節をしているから左側で頼む」
「任された」
肉を休ませるために、右側から火を強くしている。
これもＢＢＱの基本だ。
コンロの上に肉串が載ると、ジューという音とともに煙がモクモクと立ち上る。
同時に肉の香ばしい匂いがしてきた。
「こんなに美味しそうな匂いがするんですね。焚火で肉を焼くのとは、また違った香りがします」
「炭の匂いが混じってるからな。普段よりも焦げやすいから気を付けよう」



「任された」
エヴァはまだ背が低いので、手をいっぱい伸ばしてコンロに肉串を載せていた。
見かねて支えようとしたが、「必要ない」と言われてしまう。
確かに、求められていないのに助けるのは違うか。
私は野菜を並べていく。肉よりも火の通りが遅いこともあって、早めに置いておくのがコツだ。
ククリは飲み物の準備や、色々な片付けなどをしてくれている。
きなこは簡易用ベッドの上でお腹を見せながら寝転んでいた。炭の香りが毛につきそうだ。
魔力のおかげか、火力が強く肉がすぐに焼ける。
「ククリ、エヴァ、先に食べていいぞ。きなこの分は食べやすいように切るから、少し待ってくれ」
「いいんですか？」
「ＢＢＱってのは年長者が肉を焼いて、若者が食べるんだよ」
「シガ、ありがたく」
二人に肉串を手渡す。早く食べたいと言わんばかりに口が動いた。
魔物の肉は何度か食べているので美味しさがわかっている。野菜はＮｙａｎｙａｓｏｎ（ニャニャソン）のものだし、組み合わせとしても悪くないだろう。



「いただきます！　んー！　なんですかこれ、肉汁が凄いです！」
「シガ、いつもより美味しすぎる」
「はは、そうだろう。こうやって野外で食べると、より美味しく感じるんだ」
自分で言って、いつも野外だと気づく。
だが二人には聞こえていなかったのか、はふはふと肉串に夢中だ。
きなこが待ちきれないとばかりに立ち上がったので、小さく切ってお皿に入れる。
「がうがうっ！」
「おお、勢いよくいったな」
きなこはよく食べる。フェンリルは好き嫌いがないらしく、またアレルギーもなく、人間と同じものを食べられる。
ガツガツと頬張ると幸せそうに舌を出して、へっへっと笑顔を見せてくれた。
「まだいっぱいあるから、たくさん食べるんだぞ」
それからもたくさん焼いていく。その場面で、気づいたことがあった。
「シガ様も食べてください。交代しますよ」
「シガ、交代」
「いや、いいんだ。私は後で食べたい派なんだ」

納得いっていないような二人をよそに、次々と肉串を手渡した。
私は幼少期、児童養護施設で育った。そのとき、夏休みのイベントでＢＢＱをしたことがある。
大人たちは額の汗をぬぐいながら、私たち孤児に肉をたくさん焼いてくれた。
当時は人と馴染めなかったこともあり、黙々と食べながらこう思っていた。
なぜ、そんな過酷で面倒なことをするのだろうと。
子供たちはいっぱいいる。適当に任せて、のんびりしていたらいいのに。
でも、わかったんだ。
「ＢＢＱっていいものだね。エヴァちゃん」
「私の好きなイベントはＢＢＱ」
みんなの笑顔を見ているだけで幸せなのだ。おそらく、職員も同じ気持ちだったのだろう。
あの頃の私は満ち足りていなかった。でも、今は違う。
この幸せをずっと大切にしていきたい。

◇　◇　◇

「ふう、美味しかったな」



「はい。こんなに食べたのは久しぶりです。ＢＢＱって幸せの極みですね」
「お腹パンパンのパン」
「がう……！」
魔物の肉は脂がたっぷりでジューシーだった。
魔力が高い魔物は美味しいのかもしれない。
山菜などは少し味気ないが、ドレッシングがあれば無敵だ。
だが、肝心の後片付けが残っている。
重い腰を上げようとしたら、ククリが立ち上がって私を見つめた。
「ダメです。シガ様はゆっくりです」
「いやでも――」
「シガ、私たちは仲間」
エヴァからも強く言われてしまって、その場でお座りする。
手持ち無沙汰だったので、近くのきなこを抱きしめた。
顔をうずめて、久しぶりのフェンリル吸い。うん、やっぱり炭の匂いがするな。
「さて、今日はもう寝ようかと思っていたが、せっかくなら少しだけ夜更かししないか？」
無事に片付けを終えて、甘い果物をおやつにしていた。

いつもならテントですぐ寝るが、今日はもう少しだけみんなの笑顔が見たくなった。
「めずらしいですね。トランプですか？」
「いや、トランプは夏に適していないんだ」
「シガ、怪しい」
以前、船でトランプをしてボロボロに負けた。それ以来、私はトランプの話題を出すことをやめた。
エヴァがジト目で私を見ているが、気にしないで続ける。
「今日、魔法を使っていてふと考えたんだが、映画でも見ようかなと思ってな」
「映画ってなんですか？」
「……そうか、こっちの世界にはないのか」
どうやって説明すればいいのだろう。
夏といえば、夜更かしシアターだと思ったのだ。
これも、私が子供のころに体験したことを元にしているが。
「実際の人物が演技をして、劇のようなものを見せてくれるんだ。後は、アニメという架空のものがあってだな」
私が必死に説明すればするほど、二人の表情が真顔になっていく。きなこに至ってはお腹がいっぱいで鼻ちょうちんを出して寝始めた。
百聞は一見に如かず、見せたほうが早いか。
ＮｙａｎｙａｓｏｎでシアターセットとＤＶＤを購入する。
少し値は張ったが、お金とはこういうときに使うものだ。そうだよな？
プロジェクターをセットしていると、二人はまたＢＢＱをするのかと不安がっていた。
説明できない歯がゆさのまま、セッティングが完了する。
「よし、できたぞ！　――これが、映画だ！」
もちろん子供の夏といえばアニメ映画だ。
私が選んだのは、幼い頃に好きだった魔法少女が悪党と戦う勧善懲悪物語。
懐かしい音楽とともにアニメが始まると、二人は食い入るように見始めた。
「シガ様、絵が動いています。絵が！」
「凄すぎる。言葉も出ない」
「はは、そうだろう」
私としても非常に懐かしく、気づけば夢中になっていた。
個性豊かな魔法少女たちが、剣や槍、斧などを使用しながら悪党を倒していく。
最後は大悪党のボスを倒し、フィナーレだ。

エンドロールが流れ、いつの間にかみんなが涙を流していた。
いかん、笑えるほうが良かったか？
「シガ様、こんな素晴らしいものが世の中に存在していただなんて……」
「私の夢は魔法少女に決まった」
いや、二人とも気に入ってくれたようだ。
エヴァの夢は、この世界なら簡単に叶えられるかもしれない。
「シガ様、本当にありがとうございます。私たちのために、こんなにたくさんのことを考えてくださって」
「いや、私も夢中で見ていたよ。それに、みんなといるだけで幸せなんだ」
ふと、私の肩にコツンと小さな重みが乗った。いつの間にかエヴァが目を閉じている。
「……すぅ、すぅ……」
「あ、エヴァちゃん寝ちゃいましたね」
「はは、疲れたんだろう。私たちも寝るか。次の国へ着いたら、また商売で忙しくなる」
そのままエヴァを横に寝かせ、私たちもテントの中で川の字になる。
「はい！　あの、シガ様」
「どうした？」



テントの中で川の字になりながら、ククリが優しく囁(ささや)いた。
少し間を置いて、横になると私の目を見つめる。
「先ほどもお伝えしましたが、シガ様が私たちのことを色々考えてくださり、行動してくださっていることにいつも感謝しています」
「いや、私がしたくて――」
「ですが、シガ様にはもっと自分のことも大切にしてほしいです。今日、エヴァちゃんとも話していたんです。シガ様は、いつも私たちのために忙(いそが)しく動いてらっしゃいます。もっと、自分のしたいこともしてほしいです」
したいこと、か。
異世界に来てからというもの、確かに常に動いてはいる。
魔物と戦い、お金を稼ぎ、商売を考えていた。
楽しくてやっていることではあるが、本当にしたいことをすべて叶えられているかと問われると答えづらい。
大丈夫だよ、と答えようとした。しかし、ククリがこうやって真剣に尋ねてくれることは今までなかった。
ここで遠慮するのは違う気がする。

そして私は考えた。異世界に来てからやりたいことはないのかと。
誰かのためではなく、自分だけのために。
そのとき、ふとＢＢＱでの魔法を思い出した。
異世界で一番嬉しかった出来事は、魔法を扱えるようになったことだ。
何者でもなかった私が、特別になれたような気持ちになった。
そのことを素直に伝えると、ククリは柔らかな笑みを浮かべた。
「やりたいこと、あるじゃないですか」
「……自分でも気づかなかったが、そうみたいだ。ククリは、何かあるのか？」
「私も、実は魔法が……」
ククリの声が遠くなっていく。かくいう私も現実か夢かの狭間が曖昧になっていった。
だが、一つだけ決めたことがある。私たちは常に働き続けてきたといっても過言ではない。
だからこそ『夏休み』を取ろう……。

◇　◇　◇

夏休みとは、学校や会社などが暑い夏の時期に授業や仕事を長く休むことだ。



地域によっては冬休みのほうが長いこともあるらしいが、学生は基本的には三十日～四十日ほど休む。ただ、遊んでばかりはいられない。
五教科の宿題、絵日記、自由工作など、やらなければいけないことがある。
だが今の私は冒険者だ。つまり、休みの間は完全なる自由なのである。
「――ということで、私たちは『夏休み』を取ろうと思う。もちろん、国での観光などは今まで通り行う。だが、各自やりたいことを考え、行動しようというわけだ」
翌朝、私は『夏休み』について説明していた。
当然だが、異世界でも学校がある。二人は通ったことはないが、似たような制度があるとのことだ。
もちろん、これも提案だ。答えはわかっていたけれど。
「良いと思います。シガ様にはゆっくり休んでほしいですから」
「いい考えだと思う」
「がうがう」
話はすぐにまとまり、各々どんな『夏休み』を取るのかとなった。
どうせならば本当にしたいことをしよう。
「昨日、ククリとも話して気づいたが、私は魔法についてもう少し深く知りたい。今までは何とな

く使っていただけだが、魔法とは何なのか、私は一体どんなことができるのか、突き詰めていきたいんだ」

次に行く国も大きいと聞いている。

そこで魔法について調べることもできるだろう。

「私も同じで恐縮なのですが、魔法についてもっと詳しく知りたいです。シガ様のおかげで使えるようになって、凄く楽しいんです」

まさかククリも同じことを考えていたとは驚いた。

だが、これも彼女たちが私を気遣ってくれたおかげでわかったことだ。

ただ旅をするだけではなく、お互いの気持ちを伝えていく時間も大切だな。

ちなみにきなこはお洒落に目覚めてから毎晩パジャマを着ている。

何かしたいことがあるのかと尋ねると、四季折々の洋服がほしいという。

Ｎｙａｎｙａｓｏｎ（ニャニャソン）で販売されているものだけしか今のところは持っていないが、魔獣用のも販売しているかもしれない。

きなこの『夏休み』のやることも決まった。

エヴァにも尋ねることにした。

しかし、何やら決心したような表情を浮かべている。



無表情に近いので微（かす）かな変化ではあるが、目に炎が宿っている感じだ。

「私は斧を練習する」

すると突然、そんなことを言い始めた。

聞き間違いだろうか？　斧？　オーノ？　何やら私の知らない異世界単語だろうか。

「エヴァ、今なんと？」

「斧」

やはり聞き間違いではない。

滑舌（かつぜつ）もはっきり、斧と発言している。

なんでいきなりと考えたが、そういえば昨晩の魔法少女の一人が斧を使って悪党を倒していた。

バッタバッタとなぎ倒すその攻撃力は、確かに凄まじかった。

エヴァは念願の冒険者となったものの、魔物と接敵したときは基本後衛に専念してもらっている。

短剣は持っているが、防衛手段としての意味合いが大きい。

だが彼女なりに考えたのだろう。

斧の持つ攻撃力ならば補えるだろうと。

しかし、彼女の小さい身体で斧を持てるのだろうか。

ククリが私の目を見て、大丈夫でしょうか、という不安な表情を浮かべた。

私も同じ気持ちとなり、「ほかの武器のほうが――」と言いかけた。だがそこで思いとどまる。
エヴァは自分の意思で斧を使いたいと言っているのだ。それを頭ごなしに否定するのは間違っているだろう。
異世界と現実世界では生活様式や思想も何もかも違う。それに彼女とは対等な仲間なのだ。自分には合わないと判断するかどうかは、彼女が決めることだな。
「斧か、強そうでいいじゃないか。――だが、大抵の武器は重いからな。できるだけ手に馴染み、軽いものを探そう。それでも構わないか？」
といっても、完全に任せるのも違うだろう。
私には大人としての責務がある。
エヴァは親指を立てて了承してくれた。
「シガ様、ありがとうございます」
「何がだ？」
「私なら……きっと否定していました。重くて、持てないだろうって。でも、シガ様のお言葉を聞いてエヴァちゃんに寄り添っていると気づきました。自分の考えを改めたいと思ったんです」
「いや、私も同じだったよ。ただ、エヴァだってきっとわかっているはずだ。その上で、使って試してみたいんだろう」



エヴァは賢い。だからこそ、ただ守られるだけでなく、自らも強くなりたいという気持ちがあるのだ。
なら、それに口を出すのは違う。
改めて、それぞれの『夏休み』の目的を確認することにした。
「私はこの『夏休み』に魔法を勉強する。――夢は大魔法使いだ！」
「私もシガ様と同じです。――もっと人を幸せにできるような魔法使いになりたいです」
私の言葉にククリが続く。明らかに私よりも素晴らしい夢で、ちょっとだけ気まずかった。
「私は斧を扱えるようになりたい。――みんなを守れるように強くなりたい」
エヴァの気持ちは初めから変わっていない。私は、全力で応援しよう。
「がう、がうがう！　――がう、がうがう！」
きなこは四季折々の服を集めること。そして夢は――え、魔獣専門の服屋を作りたいのか!?
知らなかった。でも、応援するぞ。
大きな夢を抱きながら、私たちは次の国へ歩みを進めた。
どんな国だとしても、『夏休み』をめいっぱい楽しむぞ。

# 第一章　常夏の国ベラーノと青い海

異世界の季節は不思議で天候がコロコロ変わる。
朝は凄く寒かったとしても、夜は寝苦しいほど暑かったり、かと思えば大雪が降ったり。
なんでも、魔力が作用しているとか……。
と、細かいことは抜きにして今の天候はというと――真夏まっさかりだった。
「暑いな……」
『夏休み』を満喫すると決めて、次の国へ向かっている。
太陽は憎らしいほど私たちを歓迎し、雲一つない晴天だ。
魔物も暑さに弱いのか日中現れることが少なく、おかげで問題はない。
しかし、別の大問題がある。
「ククリ、エヴァ、きなこ大丈夫か」
「……何とか」
「ギリギリ」
「がう……」
聞けばエルフは寒さには強いのだが、夏の暑さには弱いらしい。
確かに涼しい山の避暑地が故郷だとすれば納得ができる。
そもそも、ククリの肌は驚くほど白いしな。
エヴァはダークエルフということもあってまだ大丈夫みたいだが、きなこは天然のふわふわの毛並みで足取りが重そうだ。
冒険者たちは夏の間、どうやって食い扶持を稼ぐのだろうか。
私は自称つよつよチートおじさんではあるので、魔物を倒すことはそれなりに容易い。
だが、普通ならそうもいかないだろう。重い剣を持ち、重い装備で真夏に戦うなんて考えただけでも恐ろしい。
もちろん、エルフと人間で身体の作りがそもそも違うと言えば違うのだが。
次の国への誘導看板を見つけたところで休憩することにした。無理をするのが一番良くないからな。
「よし、みんな少し待っていてくれ」
疲れ果てて座り込んでいる彼女たちを楽にさせてあげるため、Ｎｙａｎｙａｓｏｎを呼び出した。
検索欄に夏と打ち込んで、必要そうなものを一式購入する。

これとこれ、よし、これだな。
「みんな、まずはこれを舐めるんだ」
「これ……石ですか？」
熱中症対策に塩飴を購入した。
袋を開けて渡したのだが、色が黒だったのでドン引きされてしまう。
しまった、色の選択肢を間違えてしまった。
いつも無表情のエヴァですら眉をひそめている。
だが、そこできなこが私の手から塩飴を食べた。
「がう……がうがう！」
「はは、そうか美味しいか」
魔石を食べたりすることもあるので、本当に石だと思ったんだろう。
だが塩味が効いていて驚きつつも喜んでくれた。
二人も続いて舐めてくれて、美味しいと言ってくれた。
それからスポーツドリンク、さらにナウでヤングなアイテムまで購入した。
「二人とも、これを使うんだ」
「これ……風車ですか？」



「いや、ハンディファン。小型扇風機だ。ボタンを押すだけで羽根が動き、風を送ってくれるんだよ」
ペラペラと饒舌に語ってみたが、実のところ私は使ったことがないものだ。
元の世界では若者が使っていたが、恥ずかしくて手が出せなかった。
ククリがおそるおそる電源を入れると、扇風機が動き出す。
「え、凄いです！　風が！　これは魔法ですか!?」
「いや、人間の英知だよ」
「涼しい。これで魔物も倒せるかも」
「それは絶対に無理だ」
その後、きゅうりの一本漬けを食べながらふたたび歩き始める。
首に巻くクールリングも購入したのだが、凍らせないと使えなかった。魔法で何とかできるかもしれないが、ひとまずは先へ進む。
そこで地面に違和感を覚えた。ズブりと足が沈むのを感じて、慌てて視線を下げる。
地面に深く沈み込み、砂粒がサラサラと靴を流れていく。
どうやらここから砂が細かくなっているようだ。
やがて等間隔に並ぶ木々と、その枝に生る実を見て気がついた。

「シガ、果物がある」
「おそらくヤシの木だ。もしかしたら名称は違うかもしれないが、中の果実は食べられるはずだよ」
といっても、冷えてはいないだろうが。
太陽が空から降り注ぎ、背中が汗ばんでいる。
重い足取りのまま、私たちは新しい国に到着した。
その名もベラーノ。
道中にあった看板によると、年中真夏の国だそうだ。
かつて広大な砂漠だったこの大地は、深き地底からの恵みと魔力によって今の姿に変貌を遂げたと書かれている。

◇　◇　◇

正門の兵士はその国の顔のようなものだ。
元の世界でも空港などで対応が違うように、異世界でも国によって特徴が出る。
少し前に訪れたフリーズ国は厳格な雰囲気もありつつ、優しい国だった。



そしてベラーノはというと――。
「シガ、ククリ、エヴァ、きなこ。それぞれ冒険者なのか。魔獣登録は問題ない。商人としても働いているみたいだが、許可証は？」
「こちらです」
「持ってるならいいだろう。――なんてな、見せてもらうぞ！」
とにかくラフで友好的な感じだ。
そもそも服装からしてまったく違う。
普通の兵士の多くは甲冑に身を包んでいる。
だが、ベラーノの門兵は半袖に短パンの軽装備だ。
ただ服には魔力が練り込んであるようだ。ギラギラと光っており、防御力もあるらしい。
一番の大敵はこの暑さなのだろう。
さらに驚いたのは、入門許可が出るまでの歓迎の印としてヤシの実を渡されたことだ。
道中にあったものと同じだが、こっちのほうがより大きい。
真ん中に大きな穴がくり抜かれており、ストローのようなものが挿されている。
「アクア・ヤシだ。このあたりでは年中飲まれてるものだよ。酸味があって、塩分も摂れる」
その言葉に私は驚いた。この世界にも塩はあるが、あくまで調味料として認識されており、栄養

補給として直接口にする人は見たことがない。
だが、この国ではそれが熱中症対策として考えられているのだろう。
まさかの人数分をいただいたので、飲みながら待つ。
味はパイナップルに塩分を強めたような感じだ。ほどよい酸味で元気が出てくる。
「シガ様、美味しいですね。このジュース」
「そうだな。中に氷を入れて冷やして飲みたいが」
「水や氷はこの国では貴重な気がしますね」
ククリの言う通り、ここは夏の国だ。
冬の国では火の力を持つ、火の魔石が高騰していたが、ここではおそらく――。
「水の魔石？　そりゃもちろん高値で買い取りしてるよ。最近は暑いし、特にだな」
「そうですか」
やはり思っていた通りだ。
門兵の口ぶりからすると、かなり欲しがる人が多いらしい。
フリーズ国ではありふれていたものだが、買い付けを忘れていた。
とはいえ、夏だからこそ売れるものがたくさんあるはずだ。
「シガ」



しかしそこでエヴァが私の顔をじっと見つめていた。
ちょいちょいと手招くので、しゃがみ込むと、なぜか両頬を優しく引っ張られる。
「どうひはんだ」
「忘れたの。私たちは『夏休み』だよ」
その言葉でハッとなる。
そうだ。今は仕事のことは考えなくてもいいのだ。やれやれ、ブラック企業で働いていたときの癖が抜けていないな。
私が思い出したことに気づいたのか、満足そうに頷く。
頭を撫でて立ち上がると、ククリが微笑んでくれた。
もちろん、何もかも忘れることはできないだろう。
ただ自分の楽しみを優先する。やりたいことを優先する。それが、今回の目的だ。
ベラーノ国はリゾートのような雰囲気もある。気持ちを変えるにも持ってこいだな。
「ベラーノでの夏休み、満喫するぞ！」
私の掛け声に、みんなが勢いよく声を上げてくれた。

◇　◇　◇

「この国はいろんな人がいるな」
無事に許可が下りて国の中へ入る。
冒険者と思われる人たちはもちろん、高貴そうな貴族や、家族連れが歩いていた。
みんな暑そうにはしているが、それもそれで楽しんでいるみたいだ。
服は半袖が多く、冒険者たちも軽装が基本らしい。
かなり露出の激しい女性もいて、目のやり場に困ってしまう。
だが、ある意味で納得もした。
ゲームとかでよくある、この装備、どこを守っているんだ……と思われるデザインの必要性を、おそらくこの国が証明してくれた。
「シガ様、ひとまず宿を決めますか？」
「いや、それは陽が落ちてからでいいだろう。まずはどこか店に入ったりして夕涼みしてもいいんじゃないか」
私たちは三人とフェンリルの小規模パーティーだ。



普通なら大荷物を持っているが、空間魔法のおかげでほとんど手ぶらで行動している。
急いで宿を決める必要もないので、いつも通り観光がてら『夏休み』を満喫しようと話がまとまった。
「まずは武器、防具店を探そうか。魔法書なども気になるが、込み入った話になりそうだしな」
「がうがう」
「もちろんきなこの洋服屋も行くよ。より良い物を見つけたいので、しっかり下調べしてからにしよう」
魔獣専門店がこのベラーノにあるのかはわからない。こんなときインターネットでも検索できればと思わなくもないが、それはそれで味気ない。
「土が多く使われてるんですかね。今までの国と比べて色味が茶色というか」
「かもしれないな。夜は涼しいといいのだが」
何気ない会話も、また旅の醍醐味（だいごみ）だ。
そのとき、大きな斧を持っている若い女性の冒険者が歩いてきた。私は咄嗟に声をかけ、どこで手入れしているのかを尋ねた。
「ブルッシュの店がおすすめかな。この街にもいくつか武器屋はあるけど、一番良心的だ」
「なるほど、ありがとう」

「それで、誰が武器を使うの？」
「私が、斧を買う」
大きな斧を持った冒険者がエヴァの声で周りを見渡す。
だがすぐに視線を落とした。
「嘘でしょ？」
「本当。私は斧が大好き」
エヴァよ、嘘ではないと思うが、まだ大好きというのは早くないか？
しかし若い冒険者はその言葉がとっても嬉しかったのか、しゃがみ込んで斧を見せてくれた。
「斧はデカくて強い。並大抵の魔物なら大体は真っ二つにできる。だけど、斧の強みはそこじゃない。何かわかる？」
まるで哲学のような問いかけに、エヴァが顎に手を置く。
私にはさっぱりわからない。斧はデカい武器なのでただ振り回すだけなのでは……？
「格好良さ」
するとノータイムでエヴァが答えた。
まさかの外見。私は違うんじゃないかとヒヤヒヤしたが、若い冒険者はニカっと歯を見せた。
「わかってるじゃん！　ハハッ、なら大丈夫。良い斧、見つかるといいね！」



「探してくる」
どうやら正解だったらしい。
確かに格好いいが、強みになるのだろうか。
「斧で、私は魔物を真っ二つにする」
強そうな冒険者に褒められたことで、エヴァはいつになくご機嫌だ。
さすがに先ほどの大きさの斧は持てないと思うが、当人のやる気を尊重する。
「シガ、あれ」
「おお、凄い外観だな」
ブルッシュの武器屋と書かれた看板。店先には、模造品と思われる武器の彫刻（ちょうこく）が看板の代わりのように並んでいた。
木彫りにもかかわらず、かなり精巧につくられている。
手入れもしっかりしてくれそうだ。
「こんにちは」
扉を開けて元気よく挨拶（あいさつ）をした。私ではなく、エヴァだ。
いつもこういったときは物静かなのだが、今日はやる気満々のようだ。
店内はそこまで大きくはない。壁にはいかにも強そうな武器が並んでいる。

返事はなく、カウンターにも人はいなかった。
留守なのだろうか？　それだと不用心すぎるが。
「なんか音がする」
エヴァの言う通り、カーンカーンと音が鳴り響いていた。
どうやら奥からだ。鉄を何度も叩いているような、そんな感じがする。
「そういえば看板に鍛冶屋と兼業していると書いていました」
ククリが補足してくれて、謎がすぐに解けた。
よく見ると近くの看板に『御用の方は大声で叫んでください』と書かれている。
万引きされても気づかないような気がするが、大丈夫だろうか。
「こんにちは」
騒音に負けじとエヴァが声を上げる。いつもよりは大きいが、彼女の声は元々小さい。おそらく聞こえないだろう。
私ができるだけ大声で叫んだ。すると、カーンカーンと高音の鉄音がピタリと止む。
やがて現れたのは身長がエヴァほどの白髭のおじさんだった。
たとえるのは良くないかもしれないが、サンタクロースのような人だ。
このビジュアルを、私はどこかで……そうだ。ドワーフだ。



何度か見かけたことはあるが、こうやって間近で見るのは初めてかもしれない。
右手にはハンマーを持っていて、今まさに仕事をしていたのだろう。
職人、格好いい。
「そんなに叫ばんでも聞こえとるわ！」
だが、開口一番そんなことを言われてしまう。
綺麗な逆切れな気もするが、郷に入っては郷に従えだ。
「大変失礼いたしました。看板に『大声で叫んでください』と書いてあったもので」
「ふん、それとこれとは別じゃ」
絶対に別ではないと思う。なんだか、想像していたより居心地が悪い。
もしかして嘘をつかれたのだろうか？　いや、まだ決めつけるのは早計か。
「私はシガと申します。彼女たちはエヴァ、ククリ、そして魔獣のきなこです。あなたはブルッシュさんでしょうか？」
「人間族にエルフとフェンリルのパーティーなんざ珍しいな。なんでワシの名前を知っとる」
二人とも耳を隠しているのに一発で当てられてしまう。きなこは子犬モードだし、凄いな。
「冒険者さんに聞いたのです。とても良いお店だと」
「ふん、そいつの情報が間違っとる」

白髭をワシワシしながら面倒な雰囲気を醸し出す。
やっぱり違うところへ行こう。そう思った矢先、ブルッシュさんは私の腰に差していた剣を見る。
「お前さん、これ手入れしてるか？」
「え？　ああ、一応できる限りは」
「全然なっとらんぞ。まったく、ほれ貸してみい」
そう言うと、私から奪うように剣を抜き取った。
流れるような手つきに、思わず呆気に取られる。
手入れは自前だが、血や油などを綺麗にしている。ククリとも装備の点検はしているので、ぬかりはないはずだが。
「この刃こぼれからすると、ブリザード・トレントと戦ったんじゃろう？　それも一体じゃなく、複数じゃの」
「え、な、なんでわかったんですか？」
「この小さな氷魔力を見ればわかるわい。このまま放っておいたら、割れて使い物にならなくなるぞ」
驚いた。まさか一目見ただけでそんなことがわかるだなんて。
しかし、私も見てみたが傷はまったくわからなかった。ククリにも同じように見てもらうと、やはり同じ状態だという。
「微弱な魔力の結晶じゃからの。まあ、この剣を見る限りは相当な腕前だな、お前さんたち」
「……それはわかりませんが。あの、良かったら手入れなどもお願いしてもいいのでしょうか？」
「ふん、ここは武器防具店で鍛冶屋じゃ。当たり前じゃろうが」
無愛想ではあるが、仕事はキッチリしてくれそうだ。
なるほど、この店をおすすめされた理由がわかった。
「それで嬢ちゃんは斧が欲しいのか」
「なんでわかったの」
「ずっと斧に目線がいっておったからの。じゃが、その体では扱えるかわからんぞ」
エヴァのこともすべてお見通しらしい。
私が言おうか迷ったことをキッパリと口にした。
しかし、エヴァの目は何も変わっていなかった。
「知ってる。でも、だからこそ強い斧がほしい」
「ふん、その根性は認めてやる。ちょうど軽量型の斧を作ろうと思ってたんじゃ。明日までには既製品を改造して作り終える。またそのとき来い」
「いいの？」

「当たり前じゃろうが。ここをなんだと思っとるんだ」
「ありがとう。このご恩は一生」
「恩なんていらん。怪我だけはするなよ」
ぶっきらぼうだが、やはりいい人のようだ。
軽量型の斧という発想はなかった。昔走る車のおもちゃを肉抜きして軽くしたことがあったが、そんな感じだろうか。
穴あきの斧、ちょっと見てみたい気もする。
「あ、私たちの武器はどのくらいで手入れが終わりますか？」
「一週間くらいか。これでも早いほうだがな。安心しろ。代替品の武器は貸す」
おそらくそうなんだろう。だが、思っていたよりもかかる。一応、短剣などは持っているが、メインの武器は預けようとしているロングソードしかない。
これを機会に買うこともできるが。
「シガ様、同じロングソードにしますか？」
「……いや、必要ないかもしれないな」
「必要ない？」
「私たちは今まで武器に頼りすぎていた気がする。例えばもし、ブルッシュさんの言う通り、戦闘



立ち読みサンプル
はここまで

中に武器が壊れてしまったら大変なことになっていた。だからこそ、魔法だけで魔物を倒す練習をしておくのはどうだ？」
異世界に来てからというもの、剣は私の大事な相棒だ。
魔法を習得してからは両方使っているが、どうしても剣に頼るところが大きい。
それは後から魔法が扱えるようになったククリも同じだ。
使い慣れた物に頼りすぎるのではなく、剣も魔法も卒なくこなせるようになったほうが良いだろう。
もちろん、予備の武器を持っているほうが安心だ。しかし、それでは緊張感が足りない。
私たちの旅は楽しいだけではなく、命がかかっている。そのことを忘れてはいけないのだ。
「私も後ろに守られてるだけじゃなくて、前で戦えるようになりたい」
するとエヴァが私たちの間に割って入った。
彼女も色々考えているのだろう。魔法に専念すれば、エヴァのことをしっかり見た上で守ることができる。
ククリは結構な時間悩んでから同意してくれた。仲間の言葉だけで判断するのではなく、しっかりと自分に落とし込んでから決めてくれたようだ。私も間違えてしまう可能性があるので、そうやって真剣に答えを出してくれるのはありがたい。